

Title	スミスの価値論と「初期未開の状態」
Sub Title	A. Smith on "Early and rude state of society"
Author	羽鳥, 卓也
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1974
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.67, No.10 (1974. 10) ,p.847(31)- 864(48)
JaLC DOI	10.14991/001.19741001-0031
Abstract	
Notes	伊東岱吉教授退任記念特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19741001-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

油ショックを転機に、先進國中第1位のインフレーションと今春以来の第3位の成長率低下(マイナス成長率)、つまりスタグフレーションの泥沼に入り、一大転換期を迎えています。輸出競争力もコスト・プッシュで鈍化しつつあり、当面の火を消すための総需要抑制策も短期では済まなくなっています。これがうまく行ったとしても、その後に来るものは、通産省の予測のような6~7%の成長率よりもさらに低い低成長率のように思われます。産業構造の転換がまるで容易にできるかのよう論ぜられていますが、実際は遙かにむずかしい問題であります。中小企業の転換能力と適応力がこれまた安易に論ぜられていますが、実はこれらは何れも生産力視点のみからのもので、以上述べてきたような生産関係的メカニズムの問題には眼を閉じています。ここにこそ盲点があるように思うのです。

つまり、さきにも述べた通り、私は中小企業の個別の経営能力の向上や個別企業の与えられた環境への適応努力の必要性を否定するものではありません。しかし、これだけでは、中小企業の内部で個別企業、せいぜい一部グループの競争力が強化されるだけで、上の支配者との関係はもとのままです。全体の仕組はそのままで、それに適応するだけのことです。この仕組をかえて行くことにメスを入れることに真の問題解決の道があると思われまます。

(名誉教授)

スミスの価値論と「初期未開の状態」

羽 鳥 卓 也

1 問題の所在

これまでしばしばスミスの価値論はつぎのように特徴づけられてきた。すなわち、スミスは投下労働量による価値規定の通用する範囲を単純商品生産社会に限定して、資本制社会の場では商品の価値がもはや投下労働量によっては規制されなくなり、かえってその商品の支配労働量によって規制されるようになることを主張したというのである。スミスの価値論は『国富論』の第1編の第5・6章に詳述されているが、マルクスはここでのスミスの叙述の全体を念頭におきながら、総括的につぎのような評価を書き記していた。

「ここ〔第5章〕で、A・スミスは、はじめに交換一般を、すなわち、交換価値や分業や貨幣などの性質を説明していた。交換者たちはまだ商品所有者としてのみスミスに相対している。かれらは、かれら自身の労働が商品の形態で現われているのと同じように、商品の形態での他人の労働を買う。それゆえ、かれらが支配する社会的労働の量は、かれら自身が購買のために役立てる商品に含まれている労働量に等しい。しかし、かれはそれにつづく〔第6章以下の〕諸章では、対象化された労働と生きている労働との間の交換に到達し、それからこんどは、商品の価値がもはやその商品自体に含まれている労働によって規制されるのではなく、それとは別の、その商品が支配ないし購買できる他人の生きている労働の量によって規制されるということを強調する。」⁽¹⁾

実際、『国富論』第5・6章で展開されたスミスの価値論は難解きわまるものであったから、その内在的な理解をめざす者にとって、このマルクスの評言は貴重な示唆と有力な手がかりとを与えたといえるだろう。わたくし自身もまた、これを導きの糸としてはじめてスミスの価値論に興味と関心を寄せることができた。しかし、今日わたくし自身が到達した地点に立って考えてみると、このマルクスの評言のなかには、少なくない点で誤りがあったように思われる。⁽²⁾

注(1) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, I, M. E. Werke, Bd. 26.1, S. 48.

(2) マルクスがスミス価値論について誤った解釈をした理由のひとつは、マルクスが『剰余価値学説史』を執筆するさいにも、主として1802年に刊行されたガルニエ訳のフランス語版で『国富論』を読み、そのために、原典の初版から第2版へかけて、スミスが価値論の章のなかで重大な意味をもつ改訂を行なった箇所があることに気づかなかった点にあるように思われるが、これについては拙稿「スミスにおける価値の源泉」(『三田学会雑誌』67巻6号)を参照していただきたい。

まず第一に、マルクスはスミスが『国富論』の第5章では単純商品生産社会を想定して理論展開をはかっていたと述べているけれども、わたくしにはこのマルクスの指摘が妥当であるとは思えない。

第二に、マルクスによると、スミスは単純商品生産社会を想定したために、この社会では商品による労働の支配は商品による他人の労働の生産物の支配を通して間接的にしか行なわれないということから、ここでは商品の支配労働量はその投下労働量に一致していると結論したというのである。そこで、マルクスは、スミスが第5章で商品価値はその支配労働量に等しいと言明したことは、商品価値がその投下労働量によって規制されると言明したのと同じことを意味しているにすぎないと主張するのである。しかし、わたくしはこのマルクスの解説もまたスミスの真意を伝えるものではないと思っている。

第三に、マルクスによると、スミスは資本制社会の場合では商品の価値がもはや投下労働量によって規制されなくなり、かえってその支配労働量によって規制されるようになると主張したというのであるが、わたくしはこのマルクスの解説にも同意することができない。

わたくしは本稿で、これらの論点を念頭におきながら、スミスの価値論の基本構成について考察したいと思っている。本稿第2・3節では、『国富論』の第5章でスミスがどういふ理由から交換価値の真実の尺度を探究し、どのような推理を辿って真実の価値尺度を商品の支配労働量に求めるに至ったかという点を検討するが、あわせてここでの推理過程においてスミスが果して単純商品生産社会を想定していたかどうかという問題をも考察するつもりである。また、第4節では、『国富論』第6章でスミスが想定した「社会の初期未開の状態」とはいかなる経済的・社会的関係を意味するのか、そしてまた、かれがこの社会状態では投下労働量が商品価値を規制する唯一の事情であると主張したのはどういふ推理にもとづいてのことか、といった諸問題を考察したいと思う。

2 商品価値の測定

スミスは価値論の課題を、資本制的商品の交換価値を規制する原理を明らかにすることだと考えていたが、同時にかれはこの課題に答えるためには、それに先立って価値尺度論を展開しておかなければならないと考えたように思われる。その点はスミス自身が第5章で考察すべき主題について、あらかじめつぎのように述べていたことから推察できるだろう。

「諸商品の交換価値を規制する原理を明らかにするために、わたくしは第一に、この交換価値の真実の尺度 real measure とはなにか、すなわち、すべての商品の実質価格 real price とはなにか、⁽³⁾という点を示すことに努めよう。」

注(3) A. Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, ed. by E. Cannan, 6th edn., I, p. 30.

スミスは資本制的商品の交換価値を規制する原理を解明する作業を『国富論』第6章で遂行する予定にしており、それに先立って、この第5章ではその準備作業として価値尺度論を展開しようとしているのである。ところで、第5章でスミスがどのような価値尺度論を提唱したかという点は、すでに周知のところだろうが、念のためつぎの一文を引用しておこう。

「……それゆえ、それ自体の価値がけつて変動しない労働だけが、いつでも、またどこでも、それによっていっさいの商品の価値が評価されたり、比較されたりすることのできる究極にして真実の標準である。〔かくして〕労働は、いっさいの商品の実質価格であるが、貨幣はその名目価格であるにすぎない。⁽⁴⁾」

これが第5章の主題についてのスミスの考察の結語である。つまり、スミスの意見では、商品の交換価値の真実の大きさを測定できる尺度は当該商品が市場で支配ないし購買できる労働の量であり、したがって、商品の実質価格とは、貨幣で測定された商品の交換価値のことではなくて、当該商品が市場で支配ないし購買できる労働の量を意味するのだというのである。

さて、それならスミスはこの第5章で、どのような推理過程を辿ってこいふ結論に到達したのだろうか。われわれはまずこの点を明らかにしなければならない。

マルクスは『剰余価値学説史』のなかで、『国富論』の第5章の解説を企てるにあたって、この章の冒頭におかれたみつつのパラグラフを引用している。われわれもさしあたり同じところを引用することにしよう。

第1パラグラフ 「あらゆる人の貧富は、その人が人間生活の必需品、便宜品および娯楽品をどの程度享受できるかに応ずる。しかし、ひとたび分業が徹底して行なわれた後には、1人の人間が自分自身の労働で充足できるのは、これらのうちのごく小部分にすぎない。かれはその圧倒的大部分を他の人々の労働から引出さなければならないのであって、かれの貧富は、自分が支配できる労働の量、つまり、自分が購買できる労働の量に應ずるにちがいない。したがって、ある商品の価値は、……その商品がその人に購買ないし支配することを可能ならしめる労働の量に等しい。それゆえ、労働はいっさいの商品の交換価値の真実の尺度である。⁽⁵⁾」

第2パラグラフ 「あらゆるものの実質価格、つまり、あらゆるものがそれを獲得しようと欲する人に実際に費やさせるものは、それを獲得するための労苦や手数 toil and trouble である。それを獲得して売却したり、他のものと交換したりしようと欲する人にとって、あらゆるものが実際にどれほどの値打があるかといえば、それはこれによってその人自身が節約することができ、他の人々に課すことのできる労苦や手数である。……貨幣または財貨は、事実上、この労苦をわれわれから省いてくれる。これらの貨幣または財貨は、一定量の労働の価値を含んでおり、われわれはその

注(4) Wealth of Nations, I, p. 35.

(5) Wealth of Nations, I, p. 32.

ときにそれらを、これと等量の労働の価値を含むと思われる物品と交換するのである。……世界のすべての富が、それを所有してそれをある新しい生産物と交換しようと欲する人々にとって、どれほどの価値があるかといえば、それがその人々に購買ないし支配することを可能ならしめる労働の量に正確に等しいのである。⁽⁶⁾

第3パラグラフ 「ホップズ氏がいうように、富は力である。……富の所有が即時かつ直接にかれにもたらす力は購買力、つまり、そのとき市場にあるいっさいの労働あるいはいっさいの労働生産物に対する一定の支配力である。……あらゆるものの交換価値は、それがその所有者にもたらすこの力の大きさにつねに正確に等しいにちがいない。⁽⁷⁾

さて、マルクスはこのみつつのパラグラフを『国富論』第5章から引用した後で、つぎのような批評を書き添えた。

「ここで〔スミスによって〕強調されているのは、分業によってひきおこされた変化である。つまり、富はもはやその人自身の労働の生産物なのではなく、この生産物が支配する他人の労働の量、すなわち、この生産物が購買できる社会的労働の量なのだということ、そして、この量はこの生産物そのものに含まれている労働の量によって規制されるということである。ここで実際に言われていることは、ただ私の労働は社会的労働としてのみ、したがって、私の労働の生産物は等量の社会的労働に対する支配力としてのみ、私の富を規制するという交換価値の観念だけである。……ここで強調されていることは、分業および交換価値によってひきおこされた私の労働と他人の労働との等置、換言すれば、社会的労働の等置であって、……⁽⁸⁾ けっして対象化された労働と生きている労働との区別や、その交換の特殊な諸法則ではない。」

われわれが『国富論』第5章の冒頭の第1・第2パラグラフの記述のみに注目すれば、このマルクスの指摘は非のうちどころがないようにみえるかもしれない。なぜなら、そこでの記述は、スミスが資本主義的経済関係を想定してではなく、単純商品生産＝流通関係を想定して推理をすすめていたことを示すにすぎないようにみえるからである。スミスが単純商品生産社会を想定していたのであれば、商品の価値はその支配労働量に等しいという命題は、実は、商品の価値は投下労働量によって規制されるという主張の別表現にすぎないとみなしても差支えないことになるだろう。なぜなら、単純商品生産社会では、商品による労働の購買ないし支配は、市場における商品と他商品との交換を通して間接的にしか行なわれないし、したがって、商品による他人の労働の支配は、己れの所有する商品の生産に投下された労働量に応じて実現されるほかないからである。

こうしてわれわれが第1・第2パラグラフの記載内容だけを念頭におくとき、マルクスの評言にはなんらの問題も含まれていないように思われるかもしれない。しかし、われわれがすすんで第3

注(6) Wealth of Nations, I, pp. 32-3.

(7) Wealth of Nations, I, p. 33.

(8) Theorien, I, SS. 46-7. ただし、傍点を施したところは原文のイタリック。

パラグラフを検討しようとするとき、そこにひとつの問題が見出される。この第3パラグラフは、『国富論』第1・2版への増補および改訂』ではじめて書き記されたものであり、『国富論』第3版（1784年刊）以降で挿入された文章である。これはおそらくスミスが第1・第2パラグラフの叙述の不十分さを補おうとして書き足したものとみてよいであろう。その点は、このパラグラフの末尾にも、前のふたつのパラグラフの末尾においてと同様に、商品の価値はその支配労働量に等しいという趣旨が繰返して書き記されていることからもうかがわれるだろう。ところが、ここには第1・第2パラグラフのなかには見出すことのできないひとつの注目すべき問題点が含まれているのである。

第3パラグラフのなかにはつぎの一文が含まれていた。「富の所有が即時かつ直接にかれにもたらす力は購買力、つまり、そのとき市場にあるいっさいの労働あるいはいっさいの労働生産物に対する一定の支配力である。」と。この一文で明らかのように、スミスはここで労働生産物は市場で他の労働生産物と交換されているばかりでなく、《労働》と直接に交換されることもあると考えていたのである。これで見ると、スミスは第3パラグラフの末尾でも、商品の価値はその支配労働量に等しいという趣旨を繰返して記述したのだけれども、少なくともこのパラグラフについていう限り、スミスのいう商品による《労働》の購買ないし支配とは、市場における商品による他商品の購買ないし支配を通して間接的に行なわれる他人の労働の購買ないし支配のことではなくて、市場における商品による《労働》の直接的な購買ないし支配を意味しているとみななければならぬ。してみると、スミスはここでは労働力が商品化されている社会状態を念頭において議論していたとみななければならないだろう。なぜなら、市場で商品が《労働》を直接に購買ないし支配するという事態は労働力の商品化なしには起りえないからである。しかし、この第3パラグラフでスミスが労働力が商品化されている社会状態を、したがってまた、「対象化された労働と生きている労働との交換」を念頭においていたとすれば、かれが『国富論』第5章冒頭のみつつのパラグラフで、繰返して、商品の価値はその支配労働量に等しく、したがって、労働こそが真実の価値の尺度であると言明したとき、かれは単純商品生産社会を想定していたのだとはいえないだろう。そうではなくて、かれは紛れもない資本主義的経済社会を念頭においてこの命題を書き記していたのである。

もっとも、以上に述べた私見は、これまでのところは、わずかに第5章冒頭の第3パラグラフのなかのひとつのセンテンスの記述だけをよりどころにしているにすぎないから、論証としては不十分であり、論証をさらに補強する必要があるだろう。しかし、わたくしは次節で『国富論』の第5章におけるスミスの支配労働＝価値尺度説の内容をあとづけることによって、この論証上の欠陥を容易に埋めることができると考えるから、いまここではこの論点の論証を不十分のままに放置して、つぎのことを付言するにとどめよう。

マルクスは『国富論』第5章の冒頭のみつつのパラグラフを引用し、これについてさきに掲げたような論評を書き添えただけで、この章全体のスミスの議論の基本部分の解説と論評とを果したよ

うに考えているようだが、マルクスのスミス解釈の誤りはそもそもこういう処理の仕方それ自体にあったと思われる。第5章のスミスの議論のなかの基本部分はけっして冒頭のみつつのパラグラフのなかに集約しつくせるわけではなく；むしろ第5章の主題を追究するスミスの推理過程の全容を明らかにしなければ、冒頭のみつつのパラグラフの意味内容さえもけっして正確には理解できないように思われる。次節で、この点を考察しよう。

3 支配労働=価値尺度説について

『国富論』第1編第5章の主題は、諸商品の交換価値の真実の大きさを測定できる尺度とはなんであるか、という点を明らかにすることだが、スミスはこの章の第4パラグラフ以下においてつぎのような議論を展開しているように思われる。

—商品の交換価値は、その商品が市場で交換することのできる他の商品の数量で表現ないし測定されるのだけれども、「貨幣が商業の共通の用具になると、あらゆる個々の商品はなんらかの他の商品と交換されるよりもいっそうしばしば貨幣と交換される⁽⁹⁾」。こうなると、商品の交換価値は、通常は、その商品が市場で引換えることのできる貨幣量で測定される。ところが、貨幣量で測定したのでは、商品の交換価値の真実の大きさを正確に把えることができない。なぜなら、貨幣商品たる金銀は金銀の生産事情の変動に応じてそれ自体の交換価値の大きさを変動させるにちがいないからである。だが、金銀以外の他の諸商品もまた同じ事情の下におかれているといわなければならない。「金銀は、あらゆる他の商品と同じように、その価値が変動するのであって、安価なときもあれば、高価なときもある。つまり、購買し易いときもあれば、購買し難いときもある⁽¹⁰⁾。」だが、それ自体の価値の可変なものはけっして商品の価値の真実の大きさを測定しうる尺度にはなりえないだろう。「……一尋とか一握りとかいうような、それ自体の量が絶えず変動する量の尺度は、他の諸物の量の正確な尺度にはけっしてなりえない。それと同じように、それ自体の価値が絶えず変動する商品もまた、他の諸商品の価値の正確な尺度にはけっしてなりえない⁽¹¹⁾。」—

スミスはこのように推論をすすめることによって、通常の商品や貨幣ではけっして商品の交換価値の真実の大きさを把えることができないと主張するとともに、交換価値の真実の大きさを測定できる尺度となる資格をもつものは、それ自体の価値がいついかなるところでも変動することがないという特殊な商品でなければならないのだと主張する。それなら、この社会に果してそういう特殊な商品が存在するのだろうか。スミスはそれが《労働》という商品として存在していると述べ、したがって、かれは《労働》こそが真実の価値の尺度だという結論に到達するのである。

注(9) Wealth of Nations, I, p. 34.

(10) Wealth of Nations, I, p. 34.

(11) Wealth of Nations, I, p. 35.

ここでかれが《労働》という商品の存在について語る時、スミスは労働力の商品化という事態を念頭においていたと思われるし、したがって、この第5章でスミスが想定しているのは単純商品生産社会ではなくて、資本主義社会であったということになるだろう。この点は、以下のスミスの所論の展開からおのずから明らかになる。

さて、それなら《労働》という商品は、どうしてそれ自体の価値がつねに不変であるといえるのだろうか。スミスはこの点をつぎのように説明している。「等量の労働は、いついかなるところでも、労働者にとっては等しい価値をもつとて差支えなからう。かれの健康、体力および精神が普通の状態で、また、かれの技巧と手ぎわが通常⁽¹²⁾の程度であれば、かれはつねに、かれの安楽、自由および幸福の同一部分を放棄しなければならぬ。かれが支払う価格は、それと引換えにかれが受取る財貨の量がどれほどであろうと、つねに同一であるにちがいない。」

ここでスミスのいう労働者とは、資本家によって雇用される賃金労働者とみるべきだろう。そして、引用文中の傍点の施されている箇所は、『国富論』第2版(1778年刊)で新たに挿入された一文であるが、この部分は、スミスが賃金労働者について語る時社会的に平均的な能力をもつ労働力を想定していたことを明示している。以上の諸点を看過しなければ、この引用文の含意は容易に読みとることができるだろう。

スミスによれば、いかなる時代、いかなる場所においても、賃金労働者にとっては、一定時間の労働に従事することは、つねにかれがある一定量の安楽と幸福と自由とを犠牲にすることを意味するのであり、したがって、同一時間の労働は労働者自身にとっては必ず等量の価値をもっているというのである。つまり、スミスは労働の遂行が労働者自身の肉体ならびに精神に支払わせる disutility の大きさが労働者自身にとっての《労働》の価値ないし価格の大きさだとみているのである。だから、スミスの考えでは、1時間の労働に従事することは、社会的に平均的な能力をもつ賃金労働者自身にとっては、いつでもどこでも必ず同一量の disutility を意味するはずであり、また、2時間の労働の遂行は1時間労働に従事したばあいの2倍の disutility を意味し、したがって、2時間分の《労働》の価値は労働者自身にとっては1時間分の《労働》の価値の2倍である。こういうわけで、スミスのばあいには、《労働》の価値ないし価格とは、けっして実質賃金のことを意味しているのではないのである。

労働者はつねに一定時間労働に従事していても、あるときは高い実質賃金を獲得し、また別のときには低い実質賃金を受取るということがあられるかもしれない。ところが、スミスの考えでは、こういう実質賃金の変動はけっして《労働》の価値が可変であることを示す証拠にはならないというのである。一定時間労働に従事することは、労働者自身にとっては、かれに支払われる実質賃金がどうであろうと、つねに等量の disutility を意味するため、《労働》の価値は不変とみななければなら

注(12) Wealth of Nations, I, p. 35.

ないというわけである。かくして、スミスによれば、一定時間の労働に従事することに対して高い実質賃金が支払われたとすれば、それは《労働》の価値が騰貴したということの意味するのではなくて、逆に賃金財の価値が下落したことを意味するのだというのである。その反対に、実質賃金が低下したときには、それはただ賃金財の価値が騰貴した結果にほかならないというのである。

「等量の労働は、労働者にとってはつねに等しい価値であるけれども、かれを雇用する人にとっては、あるときはより大きな、あるときはより小さな価値であるように見える。かれは等量の労働を、あるときはより多量の財貨で、あるときはより少量の財貨で購入するのであって、雇主にっては、労働の価格は他のいっさいのものの価格と同じように変動するように見える。かれにとっては、前者のばあいには労働が高価であり、後者のばあいには労働が安価であるように見える。けれども、前者のばあいに安価であり、後者のばあいに高価であるのは、実は財貨なのである。」⁽¹³⁾

スミスのいう《労働》の価値が実質賃金のことではないという点は、以上の一文によって明白であろう。スミスによって《労働》の価値が不変とみなされたのは、かれが《労働》の価値を一定時間の労働の遂行の結果賃金労働者自身の蒙る disutility の大きさとみなしたためである。かくして、スミスによれば、《労働》こそがそれ自体の価値の不変な唯一の商品であり、したがって、これこそが諸商品の交換価値の真実の大きさを測定する尺度となりうる唯一の商品であり、商品の交換価値の真実の大きさは、その商品が市場で支配ないし購入することのできる労働の量に等しいというのである。ここでかれが資本制的雇用関係を念頭においていることも、すでに明らかである。

しかし、こうしてスミスが引出したこの結論的命題は、『国富論』第5章の冒頭のみつつのパラグラフのなかですでに繰返し書き記されていたものにほかならなかった。してみると、スミスは第5章の冒頭において、この章の結論をあらかじめ読者に提示するという叙述方法を採用していたのであろう。そうだとすると、われわれはこの章の冒頭のみつつのパラグラフに繰返し記述された「商品の支配労働量」という言葉が資本家と賃金労働者との間での賃金と《労働》との交換という事態を表現するものにほかならなかったということであらためて確認しなければならないであろう。

ここで、われわれは第5章冒頭の記述部分のうち、その第2パラグラフに関して若干の補足的説明を加えることにしたい。というのは、このパラグラフのはじめに「あらゆるものの実質価格は、……それを獲得するための労苦や手数 toil and trouble である。」という記述があるため、これまでしばしば、ここでスミスは商品価値がその生産に投下された労働量によって決定されるという命題を定立したのだといわれてきたからである。しかし、私見によれば、こういう判断は誤りである。なぜなら、このパラグラフの全文を読めば明らかなように、スミスが強調しているのは、商品価値が投下労働量に依存してきまるとい点ではない。スミスがここで主張しているのは、むしろつぎの点である。商品の所有者は、市場でその商品と交換に《労働》という商品を購入することができる

注(13) Wealth of Nations, I, p. 35.

のだから、その商品はその所有者に、労働者を一定時間にわたって労働に従事させる力を与えていることになる。だから、その商品の真実の価値の大きさは、その商品を賃金として受取る代りに労働者が支出することを余儀なくされる「労苦や手数」の分量に、つまり、賃金労働者が一定時間労働に従事することによって犠牲にする「安楽、自由および幸福」の分量に等しいというのである。このパラグラフでスミスが主張しようとする主な論点は以上のとおりである。だからこそ、スミスはこのパラグラフの末尾でも、商品の価値はその支配労働量に等しいと書き記したのである。

だが、このパラグラフの記述については、もうひとつ付言しなければならないことがある。ここには「これらの貨幣または財貨は、一定量の労働の価値を含んでおり、われわれはそのときにそれらを、これと等量の労働の価値を含むと思われる物品と交換するのである。」という一文が見出される。マルクスはこのスミスの表現に異議を唱えて、「ここで価値という言葉は余計であり、無意味である。」⁽¹⁴⁾と厳しく非難した。しかし、このマルクスの批評は、マルクスが第2パラグラフのスミスの記述を投下労働量による価値規定の表明とみなしたことから生じた外的批評である。スミス自身はこのパラグラフでは、諸種の財貨はそれぞれが市場で同一量の《労働》を支配するものである限り、相互に交換可能だといっているにすぎない。したがって、「商品が一定量の労働の価値を含む」という表現は、商品の生産に投下された労働量を念頭において用いられたのではなく、その商品が市場で購買ないし支配する労働の量を念頭においてのものにほかならないのである。

さて、以上に述べてきたところが、スミスが第5章で設定した主題のスミス自身による追究過程である。ところで、われわれが本節で最後に付言しなければならないことは、スミスがこの第5章では商品の交換価値を測定する真実の尺度がその支配労働量にほかならないという命題を確立することを、この章の主題として設定しているのに、この主題の追究の過程で、同時に、商品の価値の源泉はその生産に投下された労働量であり、したがって、投下労働量は商品の価値を規制する諸要因のひとつとみなしなければならないという考え方を提示していたという点である。スミスがこの第5章の主題を、商品の交換価値の真実の尺度の探求という点に設定したのは、もともとは、商品の交換価値の規制原理を明らかにするための準備作業という意味あいにおいてであった。ところが、真実の価値尺度の探求の過程で、かれは読者に断りなしに、投下労働量をもって価値を規制する一要因とみなす考え方を提示していたのである。それなら、かれはさきに紹介したかれの議論のなかのどの論点でこの考え方を提出したのだろうか。

さきに述べたように、スミスは諸商品の交換価値は通常は市場でそれと交換される他の諸商品の数量や貨幣量で測定されているけれども、これではけっして測定される商品の真実の交換価値の大きさは把握されないと主張した。そして、かれはその理由を、通常の諸商品や金銀貨幣がそれらの生産事情の難易の変動に応じてその価値の変動を免れえないという事情に求めていた。スミスが投

注(14) Theorien, I, S. 47. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。

下労働量を価値を規制する一要因とみなす考え方を提示したのは、ここでの推論の過程においてであった。スミスはこういっている。

「ある特定量の金銀で購買ないし支配することのできる労働量、あるいは、それと交換される他の財貨の量は、そういう交換が行なわれるときにたまたま知られている諸鉱山が豊鉱か貧鉱かということにつねに依存している。アメリカの豊富な諸鉱山の発見は、16世紀にヨーロッパの金銀の価値をそれ以前の約3分の1に引下げた。それらの金属を鉱山から市場へ運び出すのに要する労働が減少するのに応じて、それらがそこへもってこられたばあいに購買または支配することのできる労働も減少したのである。」⁽¹⁵⁾

スミスによれば、金銀の交換価値、つまり、金銀の支配労働量は、その生産に投下された労働量の増減に依存して騰落ないし増減するというのである。すでに知ったように、スミスはこの第5章で、金銀を含めてあらゆる商品の交換価値の真実の大きさはその支配労働量に等しいという命題を確立することを主要テーマとしているのだけれども、この叙述でかれは、その金銀の支配労働量そのものを増減させるものは金銀の生産に投下された労働量にはかならないという見解を提出していたのである。つまり、スミスは、商品が市場で他の商品や《労働》のなにほどの分量を購買ないし支配できるのは、その商品自体がなにほどの労働が投下されて生産された生産物にはかならないからだと考えているのであろう。だから、かれは投下労働量こそが商品価値を生み出す源泉であり、したがって、商品価値の大きさを規制する一要因であると主張することになるのである。しかし、そうはいっても、スミスはこの第5章では、商品価値の高低ないし騰落がもつばらその投下労働量の大小ないし増減によってのみ規制されるのかどうかという点にまで立入って分析してはいない。『国富論』では、この課題を遂行する作業は第6章の行論に委ねられており、われわれもこの点については次節で言及することにしてしよう。

以上の検討から、われわれはスミスの価値論について、つぎのような特徴づけを与えることができるだろう。本来、交換価値とは、さしあたり商品と商品ないし貨幣との市場での交換比率を示すものにすぎないのであり、その限り、それはあくまで相対的なものであって、その絶対の大きさは把えようがない。ところが、スミスは『国富論』第5章で執拗にこの交換価値の真実の大きさを測定するための尺度を求めつづけた。これはかれが交換価値の背後に、絶対価値がひそみ、実体をもつものとしての価値が存在していることに気づいたことを意味するだろう。かれがこの価値の大きさを測定する尺度を商品の支配労働量に求めながら、しかし、この商品価値を生み出す源泉を投下労働量に帰着せしめたことは、この点を確証するだろう。だが、その際に、それと同時にわれわれがここで確認すべき点は、上述したような内容を含む『国富論』第5章のなかでスミスの価値論の基本性格がすでに明確に露呈されていたという点である。すなわち、スミスは一方で商品価値の真

注(15) Wealth of Nations, I, p.34. ただし、傍点は引用者の付したものである。

実の大きさを測定する尺度としては商品の支配労働量を選ぶべきだと主張するとともに、他方で商品価値を生み出す源泉としては商品の生産に投下された労働量を考えるべきだと主張しているのであって、ここに価値尺度の選定と価値源泉の把握との分裂が、したがって、スミス価値論の二元論的性格が早くも明確に見出されるのである。われわれは次節で、スミスの価値規制論の独得の論理構造の一端を明らかにしようとするが、そのためには、この価値論の二元論的性格を十分におさえる必要があるということをここであらかじめ指摘しておきたいと思う。

4 「社会の初期未開の状態」について

『国富論』第1編第6章でスミスが投下労働量による価値規定の適用範囲について独自の考え方を提示したことはよく知られている。スミスによると、資本の蓄積に先立つ社会状態としての「初期未開の状態」においては、諸商品それぞれの生産に投下された労働量がそれらの交換価値を規制する唯一の事情となっているが、蓄積以後の社会状態になると、投下労働量はもはや商品の交換価値を規制する唯一の事情ではなくなるというのである。それなら、スミスはどのような論拠からこの命題をひき出したのだろうか。しかし、その点を解明するには、なによりもまず、われわれは、スミスのいう「社会の初期未開の状態」というのが、いかなる経済関係をもつ社会状態を意味するのかという点を明らかにしておかなければならないと考えるので、本節ではこの点の考察を中心におこす。周知のように、マルクスはこの社会状態を直截に単純商品生産＝流通社会と解釈しており、わたくしはこの点について異論をもたないが、今日学界ではこのマルクス説を受容れないものもあるようにみえるから、まずはじめにこの点について若干の検討を加える必要がある。

たしかに『国富論』の行論全体のなかでは、スミスの「初期未開の状態」の語の使用の仕方は必ずしも一定してはいない。かれはしばしば、資本の蓄積が全く欠如しており、社会的分業も商品生産＝流通も全く行なわれておらず、万人が自給自足にある社会状態を指して、「初期未開の状態」と呼ぶことがある。たとえば、『国富論』第2編の序論のなかで、かれはつぎのような社会状態を描き出している。

「分業がなく、交換もめったに行なわれず、あらゆる人が独力であらゆるものを調達するという社会の未開状態では、その社会の業務を営むために、資本があらかじめ蓄積されたり、貯えられたりする必要は全くない。あらゆる人は、そのときどきの欲望を自分自身の勤勞によって、そのつど充足しようと努力する。」⁽¹⁶⁾

さらにまた、『国富論』の第1編の第1章や第2章では、かれが自給自足の生活を営む狩猟民族や漁撈民族を描いていることもまた、よく知られているとおりである。

注(16) Wealth of Nations, I, p.258.

しかし、だからといって、スミスはいつでも商品生産＝流通の欠如した自給自足の時代を意味するものとして、「社会の未開状態」という語を選んでいたのであるわけではない。われわれは『国富論』の第1編第4章のなかにつきの一文を見出すことができる。「社会の未開時代には、家畜が商業の共通の用具だったといわれている。⁽¹⁷⁾」

この一文で明らかのように、スミスはここでは「商業の共通の用具」が存在するような社会、つまり、社会の生産がすでに商品貨幣経済のなかに巻きこまれているような社会を「未開時代」と呼んでいる。こういうわけで、スミスのいう「社会の未開状態」というのは、必ずしも一定した内容をもっていない。それなら、スミスの価値論が展開されているこの第1編の第6章に見出される「社会の初期未開の状態」というのは、いかなる経済関係をもつ社会の状態とみればよいのだろうか。スミスは第6章のなかで「初期未開の状態」をつぎのように描いている。

——この状態にあっては、諸商品相互の交換比率は、もっぱらそれぞれの生産に投下された労働量の比率によってのみ左右される。たとえば、狩猟民族の間で1頭のビーバーをとるのに1頭の鹿をとるのに必要な労働量の2倍を費やさなければならないとすれば、1頭のビーバーは2頭の鹿と交換されることになるだろう。だが、ある種の労働が別種のものよりも辛苦の度合いが大きいとすれば、同一時間の労働の生産物であっても、辛苦の度合いの大きい方の労働の生産物は、普通の労働によって生産されるものよりも何倍か大きな価値をもつものとして評価されることになるだろう。「社会の進歩した状態」においては、普通の労働よりも大きな辛苦や熟練を要する労働に対しては、いっそう高い評価がなされ、この評価のちがいは賃金の高さに反映されているが、これと類似の評価の仕方が「最も初期の未開の時代」におけるさまざまな労働に対しても行なわれていたに⁽¹⁸⁾ちがいない。——

そして、スミスはこれにつづいてつぎのように述べる。「この事態においては、労働の全生産物は労働者に帰属する。そこで、ある商品を獲得または生産するのに通常使用される労働の量が、その商品が通常購買、支配、交換すべき労働の量を規制しうる唯一の事情である。⁽¹⁹⁾」

この引用文中に傍点が施されている箇所は、スミスが『国富論』第2版ではじめて加筆・挿入した字句であるが、これによって明らかのように、この「未開の状態」というのは、資本家と賃金労働者とが未分化な状態にある社会である。そして、スミスはこの社会状態においては、狩猟が主要産業になっていると考えているようだが、しかし、この狩人たちはビーバーと鹿とを、それぞれの捕獲に要する労働量に応ずる比率で交換するものとみなしている。してみると、この第6章に描かれる「未開の状態」というのは、資本家と賃金労働者とに分化する以前の状態にある直接生産者た

注(17) Wealth of Nations, I, p.25.

(18) cf. Wealth of Nations, I, p.49.

(19) Wealth of Nations, I, pp.49~50.

ちが相互に商品交換を恒常的に営んでいる社会状態のことである。

この点から考えれば、第6章に描かれた「初期未開の状態」というのは、マルクスが直截にいっきっていたように、単純商品生産＝流通社会のこととみてよいだろう。だが、それでは、スミスは単純商品生産社会としての「未開の状態」を資本主義以前の歴史上のある時代に具体的に存在していた社会と考えていたのであろうか。なるほどスミスはこの社会では狩猟が主要産業になっていると考えているようだから、かれは歴史の一時期に単純商品生産者たる狩人たちの住む社会が具体的に実在したと考えていたといえるかもしれない。しかし、わたくしはむしろつぎのように考えたい。注意すべきことは、この狩猟民族の間でもいわゆる複雑労働の単純労働への還元が可能になるとされていた点である。スミスは「社会の進歩した状態」になると、複雑労働と単純労働とに対する評価のちがいが賃金の高さに反映されるようになるが、「未開の状態」においてもこれと類似した評価の仕方が諸種の労働に対して行なわれると述べている。これはスミスが分業労働の発展過程において社会的に平均的な労働力が一般化してゆくことを予想していたことを示すであろう。さらにまた、ここでスミスが「未開の状態」においても社会的に平均的な労働力の存在を想定して理論展開をはかろうとしたことは、スミスが単純商品生産社会としての「未開の状態」を描くにあたって、かれがあらかじめ成熟した資本主義を念頭におきつつ、そこから資本・賃労働関係を捨象することによって、つまり、純粋に論理的な抽象という操作によって、単純商品生産社会を構想したのだということを示すだろう。したがって、スミスのばあい、単純商品生産社会はなによりもまず論理的抽象によって設定されているとみなしなければならないから、これは歴史上に具体的に実在した社会とみなすべきではない。この点についてのスミス自身の自覚がいくら不明瞭だったとしても、やはり、それはスミスの経済学の論理的要請から構築された虚構の世界とみなすべきであろう。

さて、スミスはこのように想定された「初期未開の状態」について、ここでは投下労働量が商品の交換価値を規制する唯一の事情になっていると主張した。しかも、この主張は、スミスのばあい、資本制社会の場合では、投下労働量はもはや商品の交換価値を左右する唯一の事情ではなくなるという命題と対応するものとして提出されている。それなら、スミスのこういう議論は、いったいいかなる論拠にもとづいて展開されているのだろうか。

その点を明らかにするためにわれわれはまず、資本制の商品の交換価値と投下労働量との関係についてのスミス自身の見解を考察する必要がある。スミスはこういつている。「この〔資本が蓄積されてから後の〕事態においては、労働の全生産物は必ずしも労働者に帰属するわけではない。かれは、たいていのばあいに、かれを雇用する資本の所有者とそれを分けあわなければならない。そこで、また、ある商品の獲得または生産に通常使用される労働の量は、その商品が通常購買、支配、交換すべき労働の量を規制しうる唯一の事情ではなくなる。ある追加量〔の労働〕が、賃金を前払し、その労働の原料を供給した資本の利潤として当然支払われなければならないことは明白で

(20)
ある。」

この引用文中に傍点が施されている箇所も、スミスが『国富論』第2版ではじめて加筆・挿入した字句であって、さきほどの「初期未開の状態」に関する議論のなかで「労働の全生産物は労働者に帰属する」という言葉が第2版で加筆・挿入されたことに対応するものであり、スミスの推理過程を明らかにするに過ぎない点である。

さて、この点に特別な注意を払うなら、資本制社会の場では、投下労働量がもはや商品価値を規制する唯一の事情にはならないというスミスの主張は、つぎのような推理によって引き出されたものとみることができるだろう。——資本が蓄積された後には、労働の生産物は賃金と利潤とに分割されて賃金労働者と資本家との両者の間に分配されなければならない。ここでは資本家の方は労働者に対して、生産された生産物のなかの一部分に相当する賃金しか支払わないのに、労働者の方はその見返りに生産物全体を生産するのに必要な分量の《労働》を資本家に提供している。資本家と労働者との間に、このような形で、賃金と《労働》との交換が行なわれているのだから、ここでは当然、生産物中の賃金部分だけで生産物全体を生産するのに必要な量の労働を購買ないし支配しているということになる。したがって、ここでは当然、生産物全体が購買ないし支配できる《労働》の量は、それを生産するのに必要な労働量よりも大きいという結果にならざるをえない。だが、同一の生産物について、この二種の《労働》の量が不一致であり、その支配労働量が投下労働量よりも大きいという事実は、投下労働量が資本制的商品の価値を規制する唯一の事情にはなりえないということの意味するだろう。というわけはこうである。すでに『国富論』第5章で明らかにされたように、商品の価値の真実の大きさを測定する尺度は、その支配労働量なのであり、したがって、商品の交換価値の真実の大きさはその支配労働量に等しいはずである。そしてまた、やはり『国富論』第5章で明らかにされたように、商品の生産に投下された労働量はその価値の源泉であって、その限り、商品価値の大きさを規制する役割を演ずるものといえよう。ところが、資本制社会の場では、同一商品の支配労働量と投下労働量とが不一致になるというのだから、ここでは投下労働量は商品価値を規制する唯一の事情であるとはいえないのだというわけである。——

スミスの議論は、おそらく、上述したように、資本制社会の場では同一商品の支配労働量と投下労働量とが不一致にならざるをえないという点を根拠に展開されたものとみてよいだろう。そうだとすると、前節末尾に指摘したスミスにおける価値尺度の選定と価値源泉の把握との分裂が資本制的商品の価値の規制原理の究明において、このような形で顕然化せざるをえなかったということこそが、スミスに投下労働量による価値規定の適用範囲を制限させた事情だったといえるだろう。

ただし、ここでひとつだけ付言しておきたいことがある。それは、このようにスミスが資本制社会の場ではもはや投下労働量は商品価値を規制する唯一の事情ではないと述べたからといって、そ

注(20) Wealth of Nations, I, p.51.

れでスミスが資本制的商品の価値はその支配労働量によって規制されるようになるのだと主張したことになるわけではけっしてないということである。さきに行ったように、マルクスはこの種の解説をしているけれども、スミス自身は『国富論』第5・6章のなかでは一度も支配労働量が商品価値を生み出す源泉であるとも、支配労働量が商品価値を規制する要因であるとも述べてはいないのである。商品の支配労働量は、スミスのばあいには、つねに商品価値を測定する尺度とみなされているにすぎない。この根本を理解しなければ、スミスの価値論はただ混乱した妄説として解説されるほかはない。なるほどスミスは投下労働量が資本制的商品の価値を規制する唯一の事情ではなくなると述べた。しかし、スミスの意見では、資本制社会においても、商品価値を生み出す源泉はやはりその生産に投下された労働量なのであり、その限り、投下労働量は依然として商品価値を規制するひとつの要因であるにはちがいないのである。スミスが資本制的利潤の源泉を賃銀労働者の遂行する労働の生み出す追加価値にあると主張するのも、かれがこのように商品価値の源泉をその生産に投下された労働量に求めるという見解を堅持していたことにもとづくのである。⁽²¹⁾

それはともかく、資本制的商品の価値についてのスミスの考察が以上にみたようなものだったとすれば、われわれはそこから単純商品の価値についてのスミスの考察をあとづけてゆくための重要な手がかりをつかむことができるはずである。そこで、われわれは再びスミスのいわゆる「初期未開の状態」に戻ることにしよう。すでに知ったように、スミスはこの状態では投下労働量が商品の交換価値を規制する唯一の事情になっていると主張している。スミスは、おそらくつぎのような推理によってこういう主張をしたものと思われる。

——資本制社会では、労働者は資本家から生産物中の一部分に相当する賃金を支払われ、その代りに生産物の全体を生産するのに必要な《労働》の量を資本家に提供している。これに反して、「初期未開の状態」では労働者は自然に対して労働を加えることによって労働の全生産物を獲得しているが、この人間と自然との間の物質代謝の過程を、資本家と賃金労働者との交換の關係に擬制して表現すれば、つぎのようになる。すなわち、労働者は自然から労働の全生産物を賃金として支払われているが、その代りに労働者はこの生産物全体を生産するのに必要な《労働》の量を自然に対して提供している。そうだとすると、労働者と自然との間には、労働の全生産物とその生産に必要な量の《労働》との交換が行なわれていることになる。このばあいには、この全生産物の支配労働量と投下労働量とは全く等しいということになるだろう。だが、すでに『国富論』の第5章で明らかにされたように、生産物の交換価値の真実の大きさはその支配労働量に等しいのだし、また、生産物の交換価値を生み出す源泉はその生産に投下された労働量であり、その限り、投下労働量は交換価値を規制する要因である。ところが、この社会状態にあっては、同一生産物の支配労働量と投下労働

注(21) この論点については、前掲拙稿「スミスにおける《価値の源泉》」のなかで詳述されているから、あわせて参照していただきたい。

量とは全く等しいのだから、ここでは投下労働量が生産物の価値を規制する唯一の事情になっているといわなければならない。――

単純商品の価値はもっぱら投下労働量によって規制されるというスミスの命題は、ほぼ以上にみたようなスミスの推理過程からひき出されたように思われる。ところが、この点に関するマルクスの指摘はつぎのようなものであった。

「この〔スミスの「初期未開の状態」という〕前提の下では、労働者は単なる商品の販売者であり、そこで、ある人が他人の労働を支配するのは、ただかれが自分の商品で他人の商品を購入するばあいに限られる。それゆえ、かれは自分の商品でかれ自身の商品に含まれているのと同じだけの他人の労働を支配するにすぎない。というのは、双方の人は互いに商品を交換しあうだけであり、諸商品の交換価値は、それに含まれている労働時間ないし労働量によって規制されるからである。」⁽²²⁾

マルクスによると、スミスがここで想定している単純商品生産社会では、当然労働力が商品化されるということはあるから、ここでは商品による他人の《労働》の購買ないし支配は、市場における商品による他人の労働生産物の購買を通して間接的にしか行なわれるはずがない。そのため、スミスは、ここでは商品と商品との交換はそれぞれの生産に投下された労働量によって規制されると主張することになる。なぜなら、スミスは、ここでは商品による《労働》の支配がこの商品と商品との交換を通して間接的にしか行なわれないということが、商品の支配労働量を当然その商品の生産に投下された労働量に依存せしめ、前者を後者に一致せしめるはずだと推論することになるからだというのである。

なるほど単純商品生産社会では市場において商品が直接に《労働》を購買ないし支配するということはありえないだろう。それはマルクスのいうとおりである。しかしマルクスのように、スミスがその事実を根拠にして支配労働量と投下労働量との一致を説いたとみなすのは、スミス自身の推理過程に内在した理解の仕方とはいえない。スミス自身は「初期未開の状態」と資本主義社会とでは富の取得ないし分配の事情にちがいがあるという点に商品の支配労働量と投下労働量との一致もしくは不一致をひきおこす根源を認めていた。この点はすでに述べたとおりだし、また、両社会の分配事情のちがいについての明確な指摘が『国富論』第2版で加筆・挿入されたということも、さきに指摘しておいたとおりである。わたくしは原典第2版のこの改訂箇所を重視し、それにもとづいてマルクス説に対して異議を唱えるのである。

しかし、それにしても、単純商品生産社会では投下労働量が商品価値を規制する唯一の事情であるという命題を確立するスミスの論証の仕方には、われわれにとって、なお問題にしなければならない論点が残っている。たしかに、マルクスが指摘したように、単純商品生産社会では商品による《労働》の直接的購買ないし支配ということはあるはずである。それにもかかわらず、スミ

注(22) Theorien, I, S.49.

スはここで「商品の支配労働量」について語っていた。さきにも述べたところだが、私見によれば、その理由は、スミスが単純商品生産社会における物質代謝の過程を資本・賃労働関係に擬制して描き出したためだと思われるのだが、この点について若干補足しておきたいと思う。

スミスがかれの独自の経済学の理論体系の構築を企てるにあたって、その体系の冒頭に「初期未開の状態」を構想・設定したことは、かれがこれを複雑きわまる資本主義の経済機構を分析するために最初に踏まなければならぬ手続と考えていたことを意味するだろう。かれは単純商品生産社会を資本主義の論理的先行物として、したがって、資本主義の機構の分析にとってその基礎ないし端緒を与えるものとして、成熟した資本主義社会を念頭におきつつ、そこから資本・賃労働関係を捨象することによって構想・設定したのであろう。こうして、スミスのばあい、単純商品生産社会は複雑な資本主義の現実から抽象という論理上の操作によって形づくられたものであったろう。ところが、それでいて、スミスはこの単純商品生産社会における物質代謝過程を描写する段になると、資本制的関係を体現する概念や範疇をそこへ逆輸入して説明するという倒錯的結果に陥ったのであった。こういう点は、『国富論』のなかのいくつかの個所に認められる。たとえば、スミスはつぎのように述べている。

「労働はいっさいの物に支払われた最初の代価、つまり、最初の購買貨幣であった。世界のいっさいの富が最初に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってであった。」⁽²³⁾

見られるとおり、人間と自然との物質代謝の過程の本来の姿も、スミスの手にかかると、資本主義的商品経済のなかに生まれてくる諸観念によって染色されて描かれる。人間は自然から富を支払われるが、そのさいには、その代価として《労働》を自然に対して提供しなければならない。だから、人間と自然の間では、富と富の生産に必要な量の《労働》とが交換されているのであり、したがって、富はここでもそれだけの量の《労働》を購買ないし支配しているというのである。こうして、スミスのばあいには、労働力が商品化されている資本主義社会で富が《労働》を支配・購買しているのと同様に、非資本制的社会の富もまた《労働》を支配・購買するものとして描かれるのである。

さらにまた、スミスが「初期未開の状態」について、つぎのように記述していることも看過しえない。スミスによれば、ここでは労働の生産物はすべてがすべて労働者に帰属するというのだが、このばあいには「労働の生産物が労働の自然的報酬、つまり自然的賃金なのである。」⁽²⁴⁾ということになる。

スミスによれば、単純商品生産社会では、労働者は自然から全生産物を「自然的賃金」として支払ってもらうが、それと引換えにその生産物を生産するのに要する《労働》の量を自然に対して提

注(23) Wealth of Nations, I, pp.32-3.

(24) Wealth of Nations, I, p.66.

供しなければならぬというのである。この意味では、単純商品生産社会でも労働の生産物は直接に《労働》を購買ないし支配しているものと観念されるのである。

スミスは「初期未開の状態」を、みずから「本源的事態」と呼んで、これを資本制社会の機構を分析するための基礎ないし端緒とみなした。そこで、かれは資本制的商品の価値を規制する原理を明らかにするための予備手続として、まず「初期未開の状態」における商品の価値を規制する原理を解明しておこうとした。ところが、スミスの考えでは、この問題の解明に先立って、商品の価値の大きさそれ自体が測定されていなければならなかった。だが、スミスの意見では、真実の価値の尺度は商品が市場で支配ないし購買できる労働量でなければならなかった。むしろ、この命題はもととは、スミスが資本主義社会において資本家と賃金労働者との間に行なわれる賃金と《労働》との交換という事実についての観察から引出した命題にほかならなかった。スミスはこういう命題を「初期未開の状態」に逆輸入して、商品価値をその支配労働量で測定した。そのために、「初期未開の状態」における物質代謝の過程は、資本・賃労働関係そのものを体現する概念や範疇を用いて記述されるほかなくなり、したがって、この社会の経済諸関係はすべて資本制的に擬制されて描かれることになった。

スミスは「初期未開の状態」における商品の価値がもっぱらその生産に投下された労働量によって規制されるという命題を確立し、この命題を基礎に据えてかれの経済学の全体系の基幹部分を構築していった。われわれは以上の点を十分に承認しなければならない。しかし、われわれは同時に、スミスがこの基礎的命題を定立するさいに、資本主義の論理的先行物としてみずから設定した単純商品生産社会を資本・賃労働関係になぞらえて描いていたという点についても、十分に注意を払っておく必要がある。

（岡山大学法文学部教授）

徳川後期における貨幣市場

— 金相場と為替打銀をめぐって —

新 保 博

はじめに

われわれは、徳川時代の信用制度について一連の研究をこころみてきた⁽¹⁾。とくに、大坂の貨幣市場・金融市場がきわめて有効に機能し、徳川時代の全国の商品流通において重要な役割をはたしていたことを、為替取引を中心に明らかにしてきた。しかし、大坂の貨幣市場・金融市場がどのように機能していたか、有効に機能していたかどうかを明らかにするためには、大坂における金相場（金銀両替相場）や為替景気（為替打銀相場）の動きについての分析を不可欠としている。そして、この問題は、われわれが現在研究をすすめてつづめる物価史とも重要なかわり合いをもっている。いってみれば、金相場・為替景気についての研究は、われわれの近世信用制度研究と物価史研究の接点をなすものである。

しかしながら、これまで金相場や為替景気の変動やその要因については、十分な研究がおこなわれてきたとはいいがたい。銀遣いの大坂における金・銀の交換比率をしめす金相場は、外国為替相場と同じような機能をはたしており、金遣いの江戸と銀遣いの大坂との間の収支バランスに応じて変動したという見解が、十分な吟味・検討を経ないままうけつがれてきている。また、為替打銀

注(1) この一連の研究におけるわれわれの課題は、徳川時代の信用制度の歴史的な性格を明らかにしつつ、明治以降における近代的信用制度成立との関連に照明をあてることにあるが、すでにつぎのような論稿が発表されている。「徳川時代の信用制度についての一試論——両替商金融を中心として——」（神戸大学経済学研究年報、3号、昭和31年）、「徳川時代の商業金融——荷為替金融をめぐって——」（国民経済雑誌、115巻、1号、昭和42年1月）、「徳川時代の延為替金融——商業金融の一形態としての——」（国民経済雑誌、117巻、4号、昭和43年4月）、「徳川時代の為替取引に関する一考察——御金蔵為替を中心に——」（神戸大学経済学研究年報、15号、昭和43年）、「御金蔵為替の成立についての一考察」（三田学会雑誌、64巻、8号、昭和46年8月）、「藩札についての一考察——徳川時代の信用制度との関連において——」（神戸大学経済学研究年報、19号、昭和47年）、「徳川後期西摂農村における貨幣流通——摂津国八部郡花隈村の史料を中心として——」（兵庫県史、11号、昭和49年5月）。

(2) 徳川後期の物価史について、われわれはすでにつぎのような論稿を発表している。「幕末期・明治期の価格構造——国際的要因とそれへの対応の問題を中心に——」（社会経済史学、33巻1号、昭和42年4月）、「徳川後期の価格構造(1)」（国民経済雑誌、121巻、4～5号、昭和45年4・5月）、「徳川後期の物価水準——大坂卸売物価の動向を中心に——(1)」（国民経済雑誌、127巻、2～3号、昭和48年2・3月）、「徳川後期の物価——相対価格をめぐって——」（国民経済雑誌、130巻、6号、昭和49年12月掲載予定）。

(3) 三井高維「両替年代記関鍵」巻2、昭和8年、246ページ。